

沖

10  
2019

令和元年「沖」俳句コンクール発表

俳句雑誌[おさ]



# 伽羅の風

能村 研三

## 折口先生の御墓

折口先生の御墓や充ちし小判草  
登四郎

平成十二年五月、登四郎が亡くなる一年前、和倉に句碑が建立された時に羽咋の氣多大社と折口信夫父子の墓に詣でた時の句で、最後の旅となった。

能登一之宮・氣多大社は、折口春洋の生家・藤井家からほど近い場所であり、鳥居をくぐつてすぐのところ、折口父子の歌碑が建てられている。

右の石に折口信夫の歌が、左に折口春洋の歌が刻まれている。

葉 紐 く つ き り 挟 む 夜 の 秋

弱 冷 房 一 駅 分 の 深 寝 入 り

湯 浴 み せ る 音 も 夜 涼 の ひ と つ な る

も の 思 ふ 足 取 り で 来 る 夏 帽 子

折口信夫  
氣多のむら 若葉くろすむ 時に来て  
遠海原の 音を聴きをり

折口春洋  
春晶に 葉の葉荒びし ほど過ぎて  
おもかげに師を さびしまむとす

登四郎は國學院大学で国文学を学ぶかたわら折口信夫の影響下で短歌を詠んだ時期もあった。

國學院では日本文学史や源氏物語を聴講し、その後の登四郎の文学的思考に大きな影響を与えた人でもあ

一面の向日葵 渾身の滅び

こんにやくの刺身の薄き夜の秋

東京が少しニヒルな盆中日

低唱でなぞる 棚経伽羅の風

盆僧の下駄の白緒は凜乎たり

切れ目なく盆波挙がる荒磯巖

る。

昭和四十八年に「短歌」が「折口信夫没後二十年記念号」を特集した時登四郎の書いた文章「門中瑣事」（能村登四郎読本に収載）には、学生時代に一人折口邸を訪ねたことが書かれている。

登四郎は昭和二十九年の夏に「北陸紀行」の七十句を発表しているが、その冒頭で羽咋の折口信夫の墓に詣でた時の句が詠まれている。

#### 御墓辺に晩夏の潮声なさず

の他七句を詠んでいる。

私は大学の一年の時にこの折口信夫の墓と氣多大社を訪ねている。父が影響を受けた人であること、私が卒業した市川の八幡小学校の校歌を折口信夫が作詞していることなどにも興味を持ち、ふいに訪ねてみたくなったのである。津幡で北陸線を降りて海沿いの松林を走る一両電車に乗ったことも記憶している。

折口信夫のゆかりのある氣多大社に私の句碑が建立されることとなり泉下にいる登四郎はどんな顔をしていることだろう。

# 守宮はた井守

森岡 正作

帰省子のまづ悪友に会ひたがる  
炎天を会はねばならぬ人がゐる  
広重の線太々と騒雨くる  
守宮はた井守か夜の訪問者  
朝顔の一花一花に喫水線  
はらからのみんな遠くに赤とんぼ  
秋螢父母誘ひて来るごとし

## 蜻蛉来よ

田舎は旧盆で、学生時代や教員の夏休みには、お盆に合わせていつも帰省していた。その前半は天気が良ければ、必ず川へ鮎を獲りに行っていたが、お盆が過ぎるとめっきり秋らしくなり、水も冷たくなつて、潜るのが億劫になることもあつた。そんな時は座敷で本を開いたりもするのであるが、そんな私を尋ねて来る唯一の友が鬼やんまであつた。大きいのは二十センチ近くあり、その飛行姿は実に優雅で美しく、赤とんぼを戦闘機に例えるなら、まさに重爆撃機の貫禄があつた。それに何より人懐っこく、こちらが話掛けたくなるほどであつた。

登四郎先生に「蜻蛉来よ聖少年の祈る手に」という句がある。長崎で殉教の二十六人聖人碑を見て、その中の少年に向けて詠まれたのであるが、先生も蜻蛉にある種の優しさを感じていたのであろう。

やがて東京へ帰るにあたり、座敷の長押にある父母や姉の写真に、またの一年の無沙汰を詫びるのであるが、その後肩の近くにやつて来て、私を見送ってくれるのも鬼やんまであつた。

# 能村登四郎の軌跡〔14〕

能村 研三

## 黄泉の子もうつせみの子も白緋

『幻山水』昭49

学校の教師と俳句作家としての仕事と二足の草鞋を履く登四郎は、多忙を極めながらも私たち子供たちには優しく接してくれた。子煩悩の父であったと思う。三代で生後間もない次男を、その二年後には六歳の長男を相次いで亡くした。この句は「八月二十五日長男爽一二十七回忌」と前書がある句で、〈破れ咲きの白朝顔が歿き子よぶ〉に続く句。〈白地着て血のみを潔く子に遺す〉と呼応する句で、白地、白緋とも清々しさ爽やかさを象徴する季語によって、家族に対する誠実な思いが伝わってくる。

## 磯鳴がいちはやく知る海の枯れ

『幻山水』昭49

かつて枯野に沖を見出した登四郎は、海にも枯れがあつてもいい筈だと思つた。冬になり山野が枯れ一色になるころ海は青さを失い鉛色となる。これは正に海の枯れなのかも知れない。蕭条たる冬の干潟には、鈍色の冬潮を身近に磯鳴が餌を啄む姿が可憐に映つた。登四郎は「枯野の沖」の句を作つて以来、枯れに寄せる思いは深く、同じ年には〈枯どきが来て男枯る爪先まで〉の作があり、『幻山水』の掉尾を飾っている。

## 睦みては拒み忘春の石十五

『有為の山』昭50

登四郎は教師であったので、高校生の修学旅行の引率で度々京都を訪れている。龍安寺の枯山水の庭園は白砂を敷き詰め中に十五個の石を「五、二」「三、二」「三」と置かれているので「七語三の庭」とも呼ばれて禅の境地が込められた庭園でもある。登四郎はこの十五の石組のどこかを何とか詠みたいと長年の懸案であった。京都で開かれた沖の勉強会の囑目句で林翔の特選句となった句で、この時は何故かすらすらと出来たと述懐しているが吟行句に見る見事な心象風景を発見した句で、吟行句の軽さはなく内面的に深さを感じる句である。

## いつよりか秋風ごろを病むならひ

『幻山水』昭50

元々病弱であった登四郎は、勤め先の学校の責任ある立場を熟しながら創刊間もない「沖」の仕事で多忙を極め、病院で胃潰瘍と診断され入院を余儀なくされた。へ病みて得し安息露は日々ふとり」という句があるように、働きづめであった登四郎にはブレーキをかけるにちょうどよい機会であった。十日間ほどの入院であったが、九段坂にある病院に見舞い看病に通い続けた母が体の変調を訴え、父の退院と入れ替わりに入院し脳腫瘍と診断された。これまで入院経験の無い父母にとっては虚をつかれる出来事であった。



# 蒼茫集



沁み透る

秋葉雅治

盆の月

宮内とし子

熱中症予防深夜に汲む甘露  
朝顔や入谷を出でてより萎れ  
沁み透るやうに入り来て秋涼し  
公園に百燈点る踊の輪  
無人島の岩根に憩ひ鷹渡る  
\*豪快と見えて深謀蛇笏の忌

夕立去る

高木嘉久

削られし秩父の山や盆の月  
開け放つ仁右衛門邸や蘇鉄咲く  
むらさきの色の豊かに花菖蒲  
身ほとりを包む夕暮朴の花  
八月の赤き海老綱うづくまる  
\*台風圏の大きな端に眠りけり

玄孫

大畑善昭

どこへ歸さむ着いて来しはぐれ蟻  
立葵齒科通院の最終日  
路地広くなり金魚売り来なくなり  
\*片陰も人影も脇道も無し  
ここまでと確と印して夕立去る  
町医者は祖父の代より白芙蓉

家系図の我は玄孫お盆来る  
\*生きものに居場所死に場所夏の月  
絹光りして夜を徹す月見草  
山道や盆花摘みも昔ごと  
戒名は死への饑汗し修す  
月見草たましひのまた一つ過ぐ

ゼリービーンズ 辻美奈子

サンダルにゼリービーンズのやうな爪  
楷書しか知らぬ人なり魂迎

\*更地ここ何だつたつけ猫ぢやらし  
描かれつつ向日葵焦げてゆく日暮  
すこしくは秋の風鈴らしく鳴る  
たてがみを賢く牧の秋の馬

熱き都 千田百里

爽籟や銀髪にぎやかに殖えて  
マネキンの鼻梁の褪せも秋の色  
\*暑き熱き都這ひゆく荒川線  
引き返す勇氣 八月十五日

弦月や謀叛ごころのなくはなし  
秋の夜の羽後と江戸つ子訛かな

きはみの丸さ 甲州千草

てらてらと牙柔き青唐辛子  
\*入口も出口も四角とこゝろてん

部活着を抱へ語尾まで灼けてをり  
給油所の打つ地下水てふに触るる  
素風かな供花の茎折る音さへも  
こらへたるきはみの丸さ芋の露

非常ボタン 能美昌二郎

\*山椒魚うごかず水を動かさず  
噴水の止まりて夜の動き出す  
大西日非常ボタンは強く押せ  
蓮の葉に仏の顔して雨蛙  
箒草風にまかせて丸くなり  
背伸びして児は向日葵に語りかく

かたつむり 石川笙児

\*かたつむり時には家も柳となる  
夕蟬やをとこの別れ握手して  
向日葵や吾の嘘信ず妻なりき  
句敵と遭ひたる四万六千日  
八月大名厩に在すベントツかな  
自分史に悔い多かりき割れ石榴

# 潮鳴集



絹の道

栗坪和子

\*絹の道は紙の来し道夕焼けて  
海光のふくらんで来る神輿かな  
はまなすやワインの栓を箸置に  
玄海に曾良は果てたり鰯雲  
海女桶に泥はかせをり梅雨鯨

海は大荒れ

小林陽子

名石の間にひそと梅雨茸  
\*金魚玉海は大荒れかも知れず  
九の段がすらすら言へて立葵  
夕かなかな前頭葉のひと休み  
蓮の実の飛んで帆走日和かな

夏帽子

宮坂秋湖

鎌錆びて物置小屋の隅残暑  
\*太陽はみんなにひとつ夏帽子  
里山の水豊かなり青田波  
加齢ですと片付けられしまま残暑  
おさがりの夏のシャツなりお臍出て

蟬つぶて

安藤しおん

風黙す蟬の脱ぎたて地中服  
\*生真面目は時に厄介蟬つぶて  
かなかな時雨介護車大き口開く  
代用食は死語か活語かふかし諸  
元氣出せ出せと家路にカンナ燃ゆ

# 飛鷹選評



能村 研三

竹煮草 無頼の花穂を掲げをり 佐川三枝子

竹煮草は山野の日当たりのよい場所に自生し、丈は二メートルにも達して、葉裏も茎も白っぽい。盛夏の頃、茎の上部に大きな花穂を出し、白色や帯紅色の小花をつける。果実は莢状にたれて、風に揺れると音を立てることから、ささやき草とも呼ばれる。俳人には好まれる花であるが野生味があり、無頼の花穂というに相応しい。

白地着て風を味方にしてをりぬ 小倉 征子

「白地着て」というから白緋であろうか。一般的には和装男物の夏の普段着を言う。見た目にもいかにも涼しそうで、一陣の風が吹いてくると風に袂が靡き、傍目にはとにかく悠々としていて頼もしく見える。その男前の着こなしを風が味方してくれた。

森の声ともオカリナの涼しかり 種山 啓子  
素朴で诗情豊かな澄んだ音色のオカリナは人々の心を癒して

くれる。オカリナを演奏する宗次郎の言葉を借りると「オカリナは空気を耕す」のだと。一握り位の粘土をこねて焼き上げられたオカリナは、素朴な森の声を響かせてくれる。

噴水に目立たぬ水と目立つ水 川高郷之助

大牧広さんの句に「噴水の内側の水愈けをり」という句があるが、この句も「目立つ水」と「目立たぬ水」という擬人化したところが面白い。人間にも「目立つやつ」と「目立たぬやつ」がいるが、目立たぬ水は愈けている水なのかも知れない。

萱草や岬の馬は潮を食む 木村あさ子

木村さんは青森の方なのでここで詠まれた馬は尻屋崎に放牧された寒立馬であろう。寒立馬は一年中尻屋崎で放牧されているので、近くに寄ってみることができそうだ。萱草は、東北から北海道にかけて多く咲く花である。

藍浴衣闇に納まる遠き富士 伊藤よし江

伊藤さんが住む館山は鏡ヶ浦とも呼ばれる館山湾に面した海岸からは、日本の夕陽百選にも選ばれている夕陽の名所があり、海に向こうに雄々しくそびえる富士山を見ることが出来る。藍浴衣を着て夕涼みがてら遠き富士を眺めた。

稲妻やはたと解けたる方程式 仲里 貞義

稲妻は雷雲の間、あるいは雷雲と地面との間に起こる放電現象によりひらめく火花であるが、難しい方程式を解くにも、何か稲妻の閃光のひらめきが必要なのかも知れない。人間はちよつとした刺戟により普段以上の力が出るものなのだ。

岡澤 田鶴

一 番 星

千年の裳階の反りや春夕焼  
煙にむせ一人の幅の畦火追ふ  
囀にパントマイムの吐息かな  
桜蘂降るやレグホン放し飼ひ  
葉桜となりし樹相に細き雨  
水底に幽な傾斜ありて首夏  
青鷺の身じろぎもせず此方見る  
水張田一番星を寿げり  
麦秋や女に長き水馴れ棹  
葭切の声のつきくる十二橋

若竹の壮気伽藍の松に伍す  
光陰の暗きより湧く苔清水  
白南風の光のうねり沖より来  
鹿の子の白斑に致る暮色かな  
祈禱待つ宮千年の御簾涼し  
虹立つや川の落ちあふ辺りから  
尻光る利根の大蟻舳先這ふ  
祭笛街をつらぬく川しづか  
夏つばめ雨脚切つてまつしぐら  
夕ひぐらし吾が空白を鳴き埋む

# 沖作品



# 能村研三選

朝涼し母が汁の実刻む音

福島

佐川三枝子

里歸りの娘を待つ夕べ藺座蒲団

梅干すや母の齡を追ひかけつ

エイツと袖通す派手めのあつぱつぱ

\* 竹煮草無頼の花穂を掲げをり

銃眼を覗くしづかな

福岡

小倉 征子

夏干潟 福岡 小倉 征子

天守下り地表の風に灼かれぬる

\* 白地着て風を味方にしてをりぬ

到来の酒は辛口月涼し

まくなぎに顔を泳がす橋の上

長野

種山 啓子

大らかな重力の束滝落つる

万緑の崖をかはして舟下り

ほぼづきや故郷恋ふる火種とも

\* 青芒奔放に活け高座かな

森の声ともオカリナの涼しかり

埼玉

川高郷之助

ぴつたりと言はれた筈のアロハシャツ

商店街寂びて片陰置くばかり

相撲部屋の昼下り丸ごと午睡

噴水に目立たぬ水と目立つ水

\* 夕菅に一度かぎりの朝日かな

青りんご青き風吹く津軽かな

青森

木村あさ子

霊山や祠の馬の眼の涼し

まさかり半島岬馬の大昼寝

\* 萱草や岬の馬は潮を食む

淋代や蔓あぢさゐの明るさに

千葉

伊藤よし江

\* 藍浴衣闇に納まる遠き富士

透きとほる瀬音や蛭消えてより

滴りに添へし柄杓の竹青し

走り出す子の無限大雲の峰

庭石に残るほてりや夜の秋